

「旅行か。しかしひとり旅はなあ」

「ひとりじゃないって。先輩について行くだけだから」

「その先輩がどんな人か知らないから心配なの」

わたしから無理を言うような形でコミックマーケットに行こうかとお姉さんに誘わせた翌日。夕食を終えて一息ついている両親に、細かい事情を包み隠して旅行のことを相談した。

結果は、だいたい考えていた通り。あまり色好くない。

わたしが両親の立場でも、知りもしない先輩のことを娘が持ち出してくればこう言うだろう。

「じゃあ、会ってもらってもいいけど」

ちよつとふて腐れた感じを出しながら、そう呟く。

これはもうお姉さんにも了解を取りつけてある。実際、会われて困ることもない。学校の先輩にあたる大学生で。たまに勉強を見てもらっている。という情報に嘘はないからだ。若干挙動不審なところが不安要素だが。

知られると困りそうなのは、彼女曰く、わたしに悪い遊びを教えてしまっているらしいこと。

といっても、法に触れるようなことではない。わたしが勝手にお姉さんがやっているパソコン通信やゲームなどに興味を持ち、少し質問をしたり眺めていたりするくらいのことだ。

そういうオタクっぽい、あまり一般的ではない趣味にわたしが興味を持っていることに、彼女は後ろめたさを感じてしまわらしい。だからといっては悪いが、もし両親と話すことがあっても、そういうことについては黙ってくれるはずという打算がある。こうして両親の相手をしながらつらつら考えると、酷い話かもしれない。

お姉さんがわたしに優しくしてくれる気持ちを利用しているのだから。

だがそこは、わたしになんとなく好感を抱かせてしまふ、ぼんやりしてそうなのに変なところでちゃんとしている自分を呪ってほしい。などと、勝手なことを思ってしまう。

実際、いい人なんだろう。年下の質問やわがままに付き合ってくれているのだし。

「会う、会うかなあ」

父がちらりと母の方を見る。君はどうしたいとでも言いたげな目線だ。

「先方にもご都合があるでしょうからね」

うちは父が迷うと、母がまとめに入るようなところがある。

今の状況を分析すると、父はわたしがそこまで言うならと若干こちら寄りになりつつあり、母はそんなふたりを観察しているといったところだろうか。

本人はそんなことを考えていないかもしれないが、話を続けてみなさいという母からの圧力を感じる。

「電話はどう」

上手く操られているようで少し癪だが、話が続く材料を出す。このまま打ち切られるのはよくない

「いいんじゃない」

「じゃあ、かけるから」

どちらからも止められなかったので、電話の前に行って番号をプッシュする。こちらの親機には番号を登録していないからだ。

休日の夕方にいるかどうか少し不安だったが、果たして受話器は取られた。

「はーい。どなた？」

今起きてきたかのように気の抜けた声が響くので、名乗って用件を話す。

「あー、ご両親とか。りょーかい。頑張る」

本当にこれで大丈夫かと少し心配になるが、電話を保留にする。

「今話せるって」

こちらを見ていた両親が目を合わせる。

「君が行ってくれよ」

「はいはい」

まずは母が話すことになったらしい。わたしのことについてだと、両親の力関係は母が優勢だから、父は今回もそうしたのでろう。

「代わりました。あなたが娘の先輩の。いつもお世話になってます」

挨拶から始まり、相槌を挟みながら、話が進んでいく。

「そうですか、試験勉強を。ありがとうございます」

勉強を見てもらっているのは本当なのか確認をしているのだろうか。成績のことなどもちよっと話に混じりながら、話は旅行の件になったらしい。

「ご迷惑じゃないといんですが、それに、おかしな所に行ったりしないかも心配で」  
親としてはそこが一番心配だろう。お姉さんが悪い人の可能性も見過ごせないはずだ。だから、この電話は最初の審査なんだろうから、信頼を勝ち取ってほしい。

「ええ、はい。それじゃあそうしましょう」

どうやら、なんらかの話がまとまったようだ。